人文学報 No.513-2（社会人類学分野 10）
首都大学東京人文科学研究科、2017.3


# 社会人類学演習 II 前期
## ―― 初の試みとしてのインタビュー作品集

田　沼　幸　子

## Ⅰ　はじめに

今年度から社会人類学演習IIを担当することにした[1)]。担当を希望したきっかけは、着任した前年度に一人の学生の卒業論文を指導したことにある。同学生はかつて集団で調査を行う演習に参加したことはあったものの、調査対象や内容、書き方等が指示されたものだったため、自ら決めたテーマについてどう対象を定め、聞き取りをした声をいかに取り入れて書くかについては一から学ぶような状態だった。面談を重ねて対象やテーマを絞り、本人も「やってよかった」という数日間の調査が卒業論文に結実したが、先にフィールドワークとその内容に基づいた執筆の経験があればよかっただろうと思った。

前任校（大阪大学）で３年間、半期の「国際フィールドワーク論」を担当していたため、同様の授業を本演習で行うことを提案した。この授業は、質的調査や聞き取り調査、民族誌的記述の意義についての基礎的な講義、民族誌の名作の講読と批判的読み、インタビューの練習等をしたうえで、学生自身が希望する対象者とアポイントメントをとって話を聞き、2000字の作品にまとめる、というものである。授業は前任者の中川理（現・立教大学准教授）のアイディアを元に、木村自（現・人間文化研究機構特任助教）とともにデザイン[2)]され、講義を担当した。中川の転出に伴い私が加わり、周到に用意されたパワーポイントやグループワークのための資料を引き継ぎ、事例を自分の調査のものに替えたり、読書資料を変えたりするなどしてカスタマイズしていった[3)]。

社会人類学演習IIも同様に、質的調査とフィールドワークの特徴と重要性を説明し、民族誌的の名作を吟味するところから始めた。前任校では受講者のほとんどが人類学以外の専攻だったのに対し、本学の受講者は、全員が社会人類学研究室の学生であり、学部３年生だった。このため、基本的な用語や人類学的なものの見方の理解は大変、スムーズだった。

しかし調査対象とその内容を決める際には、各自がそれなりに頭を悩ませていた。「調査対象を選ぶ指針」（資料4参照）にはこうある。

自分の「あたりまえ」を相対化できるような対象
学問にとって／社会にとって／自分にとって意義のある対象

実現可能な対象（経済面・言語面・時間面など）
安全上・倫理上問題のない対象

他専攻の学生がしばしば行いがちだった、授業期間内に聞き取りを行うのが現実的ではない対象（有名人、初めて接触を試みる外国人等）を想定するということはなかったが、逆に、話を聞きやすい知人から、新たな発見に結びつくようなテーマをどう設定するかという点が問題になった。調査対象やテーマについて、事前に授業内でブレインストーミングを行った。まず、学生を２グループに分け、その中で自由に話しあって考えがある程度まとまったところで一人ずつ発表し、教員がアドバイスを行った。その結果、当初は遠隔地の相手に電話やスカイプで調査するつもりだった者も、直接会って話を聞ける人に対象を変えた。

実践から学ぶことを重視するとはいえ、本人だけに任せるのではなく、困ったことには対応するために調査の過程に個別相談日が含まれている。この日は講義はないが、講師は授業時間に教室にいる。思うように自分の聞きたいことが引き出せなかった学生は教室に入り、相談する前にこう言った。「人類学者ってこんな難しいことやってたんですね」。この学生は、相手が聞こうとしていたテーマに関心がないことに気づき、聞く内容を変え改めて聞き取りを行った。

聞き取りが終わったあとは、どういった人にどのような話を聞き、何に焦点を当てた作品化を考えているかを発表してもらい、教員二人が感想を述べ、助言を行った。それを受けて、あらためて同一人物に聞き取りをして作品の焦点を変えた学生もいる。こうして出揃った受講生の学部生６人、聴講生の修士課程の大学院生２人の作品を、前期最終日に読みあげてもらい講評した。全員が無事に調査と作品化を行った。

中川・木村の講義デザインが他のフィールドワーク指南本に比して秀逸なのは、聞き取りの作品化で使える「テクニック」を具体的に指南している点にある[4)]。他人が語った言葉を引用するうえで、「直接引用」「間接引用」、そして、両者をとりまぜた記述があり、これらを活用して文章化することが読みやすさの秘訣であるということは、日本の教育ではほとんど教えられていない。このため、せっかく聞き取りで得た他者の言葉を三人称の間接引用だけでまとめたり、直接引用を多用したり、引用と本文のつながりがないものになってしまいがちである。民族誌の名作を読み、そこで用いられたテクニックを例示することによって、受講生の文章は、すでに「作品」として完成度の高いものとして提出されてきた。このため本論で掲載することにした[5)]。

お題目はもう十分だろう。ここからは８人の作品を実際に読み、味わっていただきたい。

## Ⅱ　受講生作品

以下、名簿順に紹介する。最後の二人は大学院修士課程一年次の聴講生である。

### 1　作者および作品名

西尾涼子　力を抜くことを意識する
岡野真帆　　標準語を話す理由
髙田春菜　　アートとは何か
内住哲生　　「音」と「音楽」の間―ある作曲学生の言葉
川上愛理　　宗教はひとにどのような影響を与えるか
大塚将　　時には昔の話を
村主直人　　過去を回想する態度
孫夢　　キリスト教と過去への意味づけ

上記の順番で次節から作品を紹介する。

### 2　学生作品紹介

力を抜くことを意識する

西尾涼子

6月上旬のとある夕方、わたしは改札前で人を待っていた。あたりを見回していると、隣に見慣れた人物が現れる。大学の先輩であり、現在社会人として忙しい日々を送る尾田孝史さん（仮名）だ。この日はインタビューではなく食事をすることになっていたため、さっそく駅から徒歩10分程度のファミリーレストランへ向かう。外はまだ明るく、早い時間に仕事を終えられて嬉しかったのか、彼はいつもよりやわらかい表情をしていた。店内に入るとジャズミュージックが心地よく流れており、ほかの客はちらほら見える程度だった。料理が届き、たわいない話をしながら食事をしていると、珍しい話題になった。声についての話である。彼は学生時代に声優の養成所に通っていたが、それに関連する話は今まで聞いたことがなかったのだ。わたしは慌てて録音を始めた。

「なんかちょっと一般論っていうか、これは俺のイメージだからあれなんだけど…（中略）…例えば、倍音が一切なんにもなかったらさぁ、機械のなんだろ、ピーーー（高音）っていう、…（中略）…あれが倍音の一切ない音で。声とかって全部音じゃん。だから、なんかその、機械っぽくない人間の声ってだからその、メインになっている音

の他に色んな高さの音とか周波数の音が合わさって、人っぽい声になってるんだけど…（中略）…人によって周波数の混ざり具合がみんな違うから声質がなんかみんな違うはずなんだけど、うん」。

このとき話したのは12分程度だったが、彼は言葉を選ぶことに悩みながらも、意気揚々と話をしていた。そして、わたしはこの話について詳しく聞きたいと思い、後日改めて尾田さんにインタビューを依頼した。

約2週間後、わたし達は再び会うことになった。この日は前回より待ち合わせ時間が遅かったため、すでに日は落ちて外は暗い。尾田さんと駅で落ち合うと、徒歩2分程度のファミリーレストランへ向かった。店内はかなり賑わっており隣の客との距離も近いため、聞き取りにはあまり適していない環境のようだった。改めてインタビューを依頼した影響だろうか、尾田さんは前回より表情が硬く少し緊張しているようにみえる。料理を注文すると、わたしはさっそくインタビューを始めた。

「で、今日は何について話せばいいのかな」。

こちらが質問するよりも先に、彼から尋ねられた。わたしは、テーマは「声における人間性」だが、コンテクストも知りたいので時系列に沿って話を聞きたい、という旨を伝える。彼はあまり釈然としない様子だったが、わたしはとりあえず養成所に入ったきっかけを尋ねた。録音を意識しているからか、彼は口調がいつもと少し違っていた。

「きっかけですね。…（中略）…最初は、なんかふとした拍子に自分の歌を録音したことがあったんすよ。で、なんか、俺ってこんな声だったんだってカルチャーショックを受けつつ…みんなよくあるやつだけどね。じゃあなんか、どうやったらどういう声出んだろうなぁ、みたいな。自分の声録音して自分で聞くみたいな、がまぁ、なんだろう、定例化じゃないけど。…（中略）…趣味で適当にちょいちょい読んでるうちに、それなりにできるようになったから、大学2年くらいまでは趣味でだけど、自分で機材とか買って、それこそ某音声投稿サイトにアップロードしてみたり…」。

その後、養成所の授業や進級システム、声優になるための6つの要素など幅広い話を聞いた。尾田さんは話しながら「懐かしいなぁ」と何度も声を漏らしていた。そして、以前話した声質の違いについて話を振る。

「これは俺の理論なんだけど、声って発音と声色と…えーと発音声色、あと、声のスピード、と、強弱。この4つ。この4つしかない、ほんとに。…（中略）…まぁスピードと強弱は抑揚でまとめちゃってもいいかもしれないんだけど…（中略）…発音と抑揚っていう部分が再現できないから、機械は機械だなって分かる。で、作ってる声に関してなんだけど…（中略）…例えばだけど、街中で、モデルさんみたいにしっかり歩いている人いたら、目立つでしょ？それとおんなじで、普段人が喋ったり歩いたりしているときって、ある程度力が抜けて、だらしなくなっている部分があるから、ま、多少だらしないほうが自然、なんすよ。…（中略）…だから多分、一般的な人がいう、声作っ

てるね、っていうのは、力んでいるせいで自然に聞こえない、だから自然に聞こえないから作っているように聞こえる。結構この辺の因果関係が難しくて、これ逆に言えば、声めちゃめちゃ作ってる人でも、力みがなければ作ってないように聞こえるんすよ」。

プロの声優が、「力を抜くことを意識する」という矛盾したことを実践しているとは、驚きだった。インタビューにおいても、ありのままの相手の話を引き出すためには「（相手が）力を抜くことを意識する」ことが成功の秘訣なのかもしれない。

## 標準語を話す理由

岡野真帆

5時限目が終わると、私はインタビュー対象者の林奈々子さん（仮名）との待ち合わせ場所へ急いだ。現在大学２年生の彼女は、大学進学を機に18年間生まれ育った京都を出て、東京で一人暮らしを始めた。サークルやアルバイトで忙しい人だが、京都のことをどう思っているか教えてほしいとインタビューをお願いしたところ、快く承諾してくれた。おしゃべり好きな彼女の話は、面白いがなかなか止まらず、インタビューは今回で3回目である。これまでは古都としてだけではない京都の魅力などを熱く語ってくれた。小学校で買うことになっていたジュニア京都検定のテキストを今でも持っているくらいには、京都に愛着を持っているようである。

夕方とはいえまだまだ蒸し暑い外を歩いて、2人であるレストランへと向かった。夕食の時間には少し早いのか、店内は空席が目立つ。向かい合って座り、注文を済ませた。

私が「ななちゃん全然標準語だよね」と切り出すと、「まぁ夏ぐらいを境にちょっと直ったかもしんない」と彼女は微笑みながら答えた。最初から東京で生活するときは標準語で話そうと決めていたが、実際に上京して1ヶ月間ほどでそんな生活は無理だと感じていたそうだ。「ずっと考えながら話してたし、考えながらってのはその、今からこの言葉を発したいんだけど、イントネーション、アクセント、こうだから話そう、みたいな」。京都に誇りを持っているように見える彼女が、わざわざ直そうと意識して標準語に直したというのは意外だった。「話すのがすごい遅くて、で、話すのが遅いと、おっとりしてると思われて、おっとりイコールはんなり、でしかも、やっぱりちょいちょい京都弁が絶対出ちゃうから、『あぁ～なんかもう雰囲気が京都だもん』ってす～ごい言われた、来て1ヶ月2ヶ月くらいはずっと言われた」。どちらかというと早口でハキハキと話す今の彼女からは想像がつかない。

それでも6月頃には話してもすぐに関西人だと見抜かれることはなくなったという。「『出身どこ？』って言われて、『京都だよ』って言うと、『え～全然関西弁でないね』っ

て言われるようになって、そうやって、自信持ってた」。私が彼女と知り合ったのは、今年の春休み。彼女が東京で暮らし始めてから1年経とうかという頃である。話していて出身地が京都だと聞き、驚いたことを思い出した。

標準語に慣れたと思っていた彼女だったが、8月の頭に、アルバイト先の先輩に方言が出ていると指摘されショックを受ける。「『林、お前なまってるよ』って言われて、ガーンみたいな」。どこが違うのかを具体的に教えてもらい、「お会計」のアクセントなどを意識的に直したそうだ。そんなことを気にしながらアルバイトをしていては疲れてしまうのではないかと思ったが、「疲れない疲れない」と彼女は言っていた。

京都弁のアクセントで「お会計」と言ったって伝わるのに、なぜ直す必要があるのだろうか。その疑問をぶつけると、彼女はしばらく考え込んでから口を開いた。「んーっとね、放送部をやってたこともあって、」そういえば高校時代は放送部だったと言っていた。彼女は続ける。「放送部だと、アクセントとかはちゃんと標準語アクセントに直さないといけないし、滑舌も良くしないといけないし、…（中略）…じゃないと、大会で勝てないから。まぁ言ったら標準語じゃないものは余計なわけ。そういう余計なものを削ぎ落としていったうえで、表現とかそういう新たなものを模索していくんだけど、…（中略）…なんかその放送部の中で培われたその、余計なものっていうか？いらないものとか不必要なものとか、はちゃんと削ぎ落として、美しく話すっていう、なんかそれが……」。

伝票が運ばれて来て、話が遮られる。いつの間にか店内はだいぶ賑わっていた。私は、彼女の言っていた「余計」という言葉が気にかかっていた。「美しく話す」には京都弁は余計なのか。放送部だった彼女の考える「美しい話し方」があるなら、それを目指せば良いと思いながらも、それではなんだか寂しいように感じてしまう。

他にも他愛のない話をした後、また話題が戻ってきたので、標準語がしゃべれるようになったことで、京都弁に対する思いが変わったりするかと尋ねた。「ん～なんだろう。なんだろうね、でも、やっぱみんな言ってくれるけど、もったいないって言われる。みんなもったいないって言う。…（中略）…なんか『え、なんで直したの？』とか『え～そのまんまでいいじゃん』、『直さなくてよかったじゃん』みたいなこと言われると、なんか自分ってすごい大事なものなくしちゃったのかな、っていう気はしちゃう、してきちゃう、そう言われると」。私も言ったような覚えがある。彼女は続けた。「今の私にとっては、ここの土地に住んでる限りは標準語を話す自分が普通なんだよ」。

店を出ると、外はすっかり暗くなっていた。

# アートとは何か

髙田春菜

6月11日の夕焼けが美しい絶好のBBQ日和にTさん宅に家族でお邪魔した。元々家族で付き合いがあるTさん一家なので、インタビューのお願いをしたところ、じゃあせっかくだからみんなでBBQでもしようという話になったのである。そういうことで、Tさんが焼いてくれた肉や野菜を頂きながらの賑やかなインタビューが始まった。

Tさんは美大を版画専攻で卒業後、学校の美術教員をしながら立体彫刻の作品を作り続けている人である。大学では版画専攻であったにも関わらず、なぜ今は立体を中心に作品を作っているのか聞くと、Tさんが学生の頃は版画ブームだったが、ブームが去るにつれて自分が本当にやりたかったのはなんだったのかと考え始めたからだそうだ。版画では自分の表現したいことを十分に伝えられない。そう考え続けて辿り着いたのが立体彫刻だった。それでは彼が表現したいこととは一体何なのか。Tさんは迷いのない口調で語り始めた。「愛とか、優しさとか、つらさとか悲しみとか、そういう目に見えないもの、形にするのがアーティストの仕事だと私は思ってるんです。私の中のテーマは生命力。生命力というのは、目には見えないけども、その人間もそうだけど、動物だって生き物だって植物だってみんな生命力を持ってて、それを形に、で、生きていると、それをどういう風に造形化するかというのが自分のテーマ。で、昔はそのアンモナイトみたいな形をこう、いわゆる黄金比のぐるぐる巻きみたいなものっていうのが、とっても、自然界にたくさんぐるぐる巻きっていうのはあるんですよ。それは何かって言ったら、やっぱりその…生命が生きていく、こう形なんですよひとつの。それをこう、なにか造形化できないかと思ってそういう形を追ってたんですけど…」。それを追い続けて、ある時Tさんはブロッコリーの造形が持つ生命力に強く惹かれた。ブロッコリーは野菜であり、いつか腐ってしまうものである。それをどう造形化し残していくか。彼は、室町時代の詫びさびの文化の中で茶室に花や野菜を長く飾るために炭にする、お花炭という炭化の技法を取り入れることにした。いつかは朽ちてしまうものを炭化することで、その生命力が一番良い時の造形を永遠に保つという方法に辿り着いたのである。

しかし、Tさんはブロッコリーなどの野菜に限らず、一見生命力とは関係なさそうな「たべっこ動物」や「リッツ」も炭化することで作品化している。それは、人間社会そのものが生命力の形になり得るものであり、誰もが知っている「たべっこ動物」や「リッツ」は、人間社会だけが持つ経済という仕組みの中の一つのツールである工業製品の一種だと考えているからである。「我々がなんで生きてるのかっていうと、経済ってものがある。(中略)で、経済というのは動いてるんですよ。人間社会そのものがやっぱり生命力なんですね。生命力の形になり得る」と、Tさんは「生命力」の幅広さについて肉を焼きながら淡々と語ってくれた。

Tさんは今まで「生命力」を「リッツ」やブロッコリーなど様々な素材を元に造形化してきた。しかし本当の素材は違った。「まあ私も30年以上この、やっていますので、えーと自分の彫刻の素材は鉄だったり、炭だったり割り箸だったり、発泡トレーだったり、紙袋だったり、色々するんだけど…ほんとの素材は、社会なんですよね。社会が彫刻の素材なんです。だから普通の彫刻家は鉄だったり資材だったり、木だったり、のが彫刻の素材でいるんだけど、僕の場合は社会が彫刻の素材」。社会が彫刻の素材である例として、割りばしアートという作品をTさんが説明してくれた。これは沢山の割り箸を接着剤でくっつけて立体を作る作品であり、しかもこの割り箸は使用済みの寿司屋のものである。寿司屋という場所に関してTさんは特別なものがあると言う。「大切なときにあの、(寿司を) 食べますよね。でそういうときに、あの誕生日おめでとうだとか、あの、あの結婚式よかったねとか、葬式で、いい人亡くなったねとかね。そういう思いが沢山ありながら、お話ししながら食事をすると。そのみんなが食べた割り箸というのは、そのみんなの、現代に住んでる人たちの思いがみんなその中にあるんだと思うんだ。それを集めることで、私は社会の断面を見せることができる。だから割り箸を、使用済みの割り箸を集めることで、今の社会の色んな人たちの色んなこと思ってる思いを集めて、それを形にする。それで彫刻を作る。それが割り箸彫刻」。つまり、私たちにとっては社会と何ら関係があるようにはみえないものが、Tさんにとっては社会の一部分としての立派な素材なのである。

現在Tさんは9月の琵琶湖ビエンナーレに向けて作品を制作中である。彼が表現したい「生命力」というキーワードは、使われなくなった酒樽から鉄の花が咲く、という出展予定の作品からも窺える。

## 「音」と「音楽」の間　― ある作曲学生の言葉

内住哲生

食器の触れ合う音、人の談笑、呼び出し音―人もまばらな郊外のファミリーレストランは、様々な「音」に満ちている。「落語って音楽…？」と僕は彼に尋ねた。すかさず彼は「音楽でしょ」と答えた。

彼はかねてからの友人だが、昔から理屈っぽい男である。芸大に通い作曲を専門とする学生なので、特に音楽に関しては一家言持ちだ。それ以前の会話の中で聞いた限りでは、彼にとって音楽とは「目的があって生み出された音声」、「納得した時に相対的に価値があると思えるもの」であるらしい。そこで、僕は落語も「音楽」なのかと尋ねたのである。彼のセオリー通りにいけば落語は「音楽」になり得る。

「言葉の解釈って入んのかなって思うけど、『歌』って考えたら入るじゃん。で『歌』じゃなくてもそもそも、必然性ってのはやっぱり音楽を言葉として見てるからこそ…」

という彼の言葉に若干の疑問を抱いた僕は、感覚的にも落語は「音楽」であると感じるのか、と問い直した。

「いや、感覚とは結構離れてきてる、そもそも。今、全て論理で言ってるから」。やはり、彼の理屈だけでは語り切れない部分があるようだ。そこで僕は具体的な音の例を挙げ、それについて彼が感覚的に「音楽」と感じるのか、尋ねることにした。落語は×、川のせせらぎは○…。人の雑踏については、「言葉が聞き取れなかったら音楽」と彼は説明した。

「まあ、『厳密に全て無い』って訳じゃない。『基本的に無い』っていう感じ。ちょっとたまに単語が聞き取れるくらいのは、許容範囲」。どうやら「文」として認識できなければ大丈夫らしい。しかし、僕が彼の言葉をメモしているうちに、彼は「あ、でも待って。全部「音楽」にするわ」と呟いた。また理屈に引っ張られているのではないか、と確認したが、これはあくまで感覚によるらしい。

その後もいろいろな音について尋ねた。車のクラクション×、暴走族の「パラリラパラリラ」×、人の会話○…。「インターフォンの音」「インターフォンの音だけ？」「だけ」「音楽じゃない」「あとは…学校のチャイム」「音楽」…。

話がここまで来たとき、「タララララタララーン」と店内の呼び出し音が鳴った。「この音。『タララララタララ』ってやつ」。彼は「なるほどね」と笑った。音の性質としては、かなりインターフォンの音に似ている。「これは音楽だと思うな、感覚だと。インターフォンって『ピーッ』…あっ『ピーンポーン』か。あ、インターフォンも音楽。なんかクラクション的な音をイメージしてた…。そうだ『ピーンポーン』だね、よく考えたら。音楽だわ」。

「ピーンポーン」

折しも、店内の呼び出し音らしき音が鳴った。まさにこれだ、とあまりのタイミングの良さに二人して笑った。「超音楽だわ。素晴らしい。名曲」と冗談めかしながら彼は言った。

その後も質問コーナーが続く。自転車のベルについても尋ねた。これについて、僕の中ではクラクションの音と同一の回答を予想していた。（クラクションは「音楽」ではない。）「ああ、『チャリンチャリン』？」「うん」「音楽だな」。予想外の答えが返ってきた。これに関しては確信を持って答えられるらしい。

「でも車のクラクションは音楽じゃない…？」「じゃないな。『ビーッ』って音をイメージしてる」。両者は置かれている文脈はほぼ同じで、カテゴリとしてはかなり近接している。どうやら彼の中ではその音がどういうカテゴリに属するものか、それが何の音であるか、という以上に、音声としてどのような特徴があるか、ということの方が重要らしい。雨の音が話題に上った時、これが鮮明に表れた。

「これはねえ、ものによるな」。その後「あの…」と少しの間彼は空を見つめるようにして、やがて「あれも音楽だわ」と答えた。彼が、迷ったことも重要な部分だから、と言っ

たので僕はフィールドノートに「○△」と記した。彼は「音楽」でない場合も想定したのである。どんな雨の音だったら「音楽」でないのか、と尋ねたところ「あのね、単一。で、距離が変わらない」と彼は答えた。

「例えば、極端な話だと、雨が降ってます、途中で窓を閉めましたっていうんだったら、めっちゃ音楽」。ならば、一か所に留まった場合はどうなのか、と尋ねた。「車とかが走ってないと、ちょっと際どくなる。要は、雨の音を変化させる要素が全くないとなると、風とかも全くないとなると…」。変化がないと疑問になってくるらしい。「ただ、変化がなくても…時間が長ければ、ちょっと音楽に見えてくる」。これは興味深い発言だった。「うん…。これはちょっと大きいかもしれない…。これちょっと大きいわ、ほんとに」と彼自身自らの言葉を嚥下するようにうなずいていた。

食器の触れ合う音、人の談笑、呼び出し音―人もまばらな郊外のファミリーレストランは、僕らが会話している間も様々な「音楽」を奏でていたのかもしれない。

## 宗教はひとにどのような影響を与えるか

川上愛理

梅雨だというのに心地よい風が吹くある日の夜、普段あまり訪れることのないおしゃれなイタリアンレストランでインタビューは行われた。今回のインタビューで話を伺ったAくんとは大学以前からの友人であり、今でも頻繁に連絡を取り合っている。半年ほど前、彼に自分がある教会に所属していることをカミングアウトされた。彼によると、その教会では様々なことに関する規則―特に恋愛について―があるのだという。今まで宗教とは無縁の生活を送ってきた私にとって、宗教というものが人々にどのような影響を与えるのかについては非常に興味深い話題であった。今回、彼が宗教とどう向き合ってきたかを中心に聞き取りを行った。

「俺が生まれてきたのは両親が教会に入ってたおかげなんだよ。二人は教会で出会って、だから俺も教会に入ってるんだけど」。席について教会に入っている理由を尋ねると、彼は少し困ったような顔でそう答えた。彼が所属している教会では、教会員同士で「祝福」を受けること（=結婚すること）が良いとされており、恋愛結婚が必ずしも良いものとされていない。彼の両親は教会で出会って「祝福」を受けたため、彼にも教会内の人と「祝福」を受けることを望んでいるのだという。

「人生で一人の女性を愛しましょうという教会の教えがあるし、両親から教会内に運命の相手はいるって小さい頃から教えられてきたから、中学生までは違和感なくて、むしろ彼氏とか彼女とか作ってる人を馬鹿だなぁって思ってた」。「それは周りがおかしいなって思ってたってこと？」「いや、中学生の時はさすがに俺が周りと違うってことに気づきはしたんだけど、周りは周り、自分は自分って思って気にしなかった」。

ここで、料理が運ばれてくる。おしゃれなパスタ料理を目にして一旦話を中断し、お互いに一口パスタを食べる。美味しい。顔を見合わせて思わず笑った。そしてしばらく食べながら沈黙が続いた後、「でも、高校生の時に本当に好きだって思える人が出来たんだよね」と、彼はぽつりと呟くように言った。

「俺は本当にその娘のことが好きで、その時はその娘のことを一生愛せるって思った。でも教会に入ってるから付き合えないし、でも好きだし、何で教会に入ってるのか分かんなくなった。すごく抜けたくなった」。普段どちらかというとあまり多くを語らない彼が、これについてはひどく饒舌だった。このことを他人に相談する機会が今まであまりなかったのだろう。ずっと誰かに聞いてほしかったのかもしれない。

「親とか周りの環境を裏切って好きな人を選ぶか選ばないかでどっちが幸せになれるか、すごい考えたよね。彼女とは両思いだったし。普通の家庭に生まれたいと思った。彼女に教会に入っていることを伝えたら、あっちは簡単に諦めてくれたんだけど、俺は諦められなかった。…苦しかった。この教会に入っている限り、好きになった瞬間失恋ってことだよ。この辛さ分かる？恋しちゃいけないんだよ。初めて親にも反抗した」。

高校時代に苦しい思いをしてきたと話すAくんは、現在も自分が教会に入っていることを心苦しく感じているのだろうか。しかし彼は意外にも現状を前向きに捉えているようだった。

「何だかんだ言っても、やっぱり親と教会を裏切ることは出来ないって思っちゃったんだよね。ていうか、俺が何で生まれてきたかって教会のおかげではあるし…教会がなかったら俺は生まれてきてないのかもって思ったら、色々嫌なことはあるけど辞められないなって」。彼の中で完全にそう思うことは出来ていない話しぶりであったが、これは今までの出来事を通して彼なりに出した結論なのだろう。そして彼は教会について、このように続けた。

「教会で教えていることには共感できるんだよね。人への感謝とか、愛しましょうということとか…俺は神を信じることは必要なことだと思ってるし、それは間違ってないと思う。結婚はね…まあ好きな人としたかったけど、自分の親とか教会内で結婚した人とか見てると、何だかお似合いだなって思ってきて、俺もお似合いな人と結婚出来るのかなって、思ってきた。雰囲気が似てるというか。教会で結婚するのもまあいいかぁって」。

人間にとって、宗教は切っても切り離せないものだ。しかしそれが争いや問題を起こす原因となってしまうこともある。それでも宗教は「必要なこと」で、誰かに対する優しさや人間らしさもまた宗教によって生まれるものなのでは、と彼は語る。様々な葛藤を乗り越えて教会に居続けることを決心したAくんは、晴れ晴れとした様子だった。しかしそれは、本当にAくんにとって最善の道だったのだろうか。釈然としない思いが残る。人生における最大イベントである結婚が、宗教によって制限されてしまっ

ている。その事実を乗り越えてしまう程、宗教が私たちに与える影響は大きいということだろうか。

## 時には昔の話を

大塚将

「ホントに、ここまで話したのは初めてかもしれない」

大学から程近い居酒屋でランチを共にしながら、私の友人であるNはそう言った。意外と話したり聞いたりしないもんだよな、と私は返し、それまで料理に手をつけず喋り通しの彼に、鯵の開き定食を食べるよう促した。

Nは私の同級生で、私が所属する合唱サークルの仲間でもある。彼は私にとって最も近しい友人の1人である。そんな彼にあえてインタビューを試みたのは、彼のライフヒストリーに興味深い一面があったからだ。というのも、彼の両親と兄夫婦の全員が、声楽家なのだ。

彼の両親は日本人だが、結婚式はフランスで挙げた。2人はそれぞれの留学先であるフランスで偶然出会い、結ばれたのだ。程なくして彼の兄がオーストリアで生まれた。さらに8年が経つと、彼の父が鹿児島の大学教授として召還され、その地でNが生まれた。

鹿児島の音楽家ファミリーに生まれたNが、なぜ東京の公立総合大学で工業デザイン学部に籍を置いているのか。彼との付き合いは2年以上になるが、私はその理由をここで初めて聞いたのだった。

「『あなたたちは勉強しなさい』ってのは、結構言われてたんだよね」

芸術家として食べていくことの困難さを見聞きしてきた彼の両親は、子どもたちに芸術の道を進ませるつもりは全くなかったのだという。

「兄貴は…なんか、お勉強できなくてね」

結局音楽の道を選んだ兄の分も、Nは両親の期待を一層背負うことになった。

しかし、Nは両親の思いに反し、絵を描く仕事を志すようになる。転機は高校1年の時だった。この年、彼は美術部に入部し、本格的な絵画の世界に初めて触れ、瞬く間にのめりこんでいった。絵に関しては人一倍負けず嫌いになると語りながら、彼は傍にあった莫蓙や、木目のついたテーブルに目をやる。

「こういうものをいかに正確に描くかとか、これをもっとよりカッコよく表現できないかな、って、そっちの方にすっごい俺はこだわり持ったね」

Nの関心は、専ら技術的な面に寄せられていた。より普遍的な美を体現できるような技術を、彼は初期からずっと追い求めている。

Nは1回目の受験に落ちたとき、浪人することに決めた。大学で理数系の勉強を続け

ることは、「たぶんこれ無理だな、俺」と確信したと同時に、描いて学べる所に行きたい、と強く望んだのだった。1人でかなりの量の大学調べをし、親を必死に説得して、入試のための絵の修行を乗り越え、そして、彼は望み通りのことができるこの大学に、自分の意志で辿り着いたのだ。

晴れて大学に入ったNが次に目指したのは、純粋な素描技術によって評価を得られる世界だった。彼は、自動車業界にそれを見出した。彼の進路を決めたのは、持ち前の対抗心だった。

「（カーデザイン業界は）ないモノをあるように描きたい人たちにとっては、もうなんだろね、すごく高度なバトルフィールド」

私はデザインの世界について全くの素人であったため、Nの話は初めて聞き知ったことばかりだった。想定された“ターゲットユーザー”に合わせたコンセプトの反映具合が、デザインの評価を大きく左右するということ。描く技術と同じくらいプレゼン能力が重要で、口頭発表が苦手なNは、その点に最も苦心し続けていること。自分の感性をユーザーの感性に合わせるのが難しいということ。ブレインストーミングのように、デザイナーの発想のままにクルマの原型を描きおこすことを、“スケッチ”と呼ぶということ。多くの人が美しいと感じる黄金律がクルマにも存在すること。それは、前輪と後輪の間にタイヤ３つ分の間隔を取るのだということ…。

Nは、私の頭に次々と浮かぶ質問に対して、即時に答えてくれた。常備している愛用のスケッチブックを取り出し、実際に絵に描いて教えさえしてくれた。それが、大学で培ってきた専門知識や技術と、これまでに6回参加してきたインターンシップでの経験の帰結であることは、間違いなかった。

「デザイナーはホントに普通の人であるべきだと思う。凡人が一番いいと思う。じゃないと、人が欲しいものってわかんないでしょ」

デザインを勉強し始めてまだ2年しか経っていないNだが、彼はすでにこのような１つの見解を得ていた。デザインは、アートではない。彼らデザイナーが競っているのは奇抜なアイデアではなく、純粋な技術と、社会一般の人々への理解の深さなのである。

「色んな人にわかって貰いたいから、そういう（感覚的な）部分を抑えれるようになりたい」

食後のアイスコーヒーを飲み終えた頃に、Nは真っ直ぐにそう言った。一端のデザイナーとして、彼は業界特有のジレンマと闘っているのだ。

Nは最後に、「こういう話するのって、不思議だな」と感想を漏らした。それは、これまでの自らの物語を他人に話した時の不思議な気持ちである。自分の見る世界を他人と共有するという不思議さである。

## 過去を回想する態度

村主直人

6月半ば、梅雨の間隙を縫った夏のような陽気だった。前日に雨が降ったせいで、大気は少し蒸していた。電話の中で、気圧が下がると、何かにグーッと押さえつけられているかのように左半身が動かなくなる、と語っていたが、今日は大丈夫だろうか。都内の団地にある鈴木さん（仮名）の自宅に向かった。一人暮らしで、普段は図書館にいることが多い鈴木さんは、僕を陽気に迎え入れてくれた。

歳は70を越え、鈴木さんはお世辞にも呂律がうまく回っているとは言えないが、終始和やかで緩やかに、閉ざされても不思議ではないライフヒストリーの深部へ、僕は僅かなためらいもなく踏み込んで行けた。

国策最後のドミニカ移民の後、早稲田大学の「移住研」で移民を斡旋していた彼は、社会の枠にはめられるのを嫌い、自身も大学を卒業してすぐブラジルへ渡った。しかし・・・

「結局は酒に飲まれた。帰るときに、帰されたんだから！（笑）みんなが集まって、鈴木これ以上いたらもうダメだって言って。ブラジルにいたら死ぬからね、向こうの強い酒ドンドンドンドン飲んでたから」。当時、ブラジルでは、昼食時にカイピリーニャ（という度数約40度のブラジルの国民的なお酒）を飲むのは当たり前だったそうだ。

「（出航の際、母親に）『お前酒だけは気をつけろよ』って言われた。・・・（略）・・・お袋の系譜はそういうのがいたんだよ。興行師みたいにさ、金儲かったっちゃ飲めー。損したっちゃ、まぁ飲め飲めー、って」。女相撲や芝居を開く興行師だった母方のお祖父さんの血を引いた、と言いながら、カイピリーリャの口当たりの良さを説明していた。僕が何度もその酒を飲んだことがあるのを、彼は知っているはずなのだが。

鈴木さんはブラジルに戻るが、また日本に帰国し、今に至る。二度の帰国はいずれともアルコール依存症によるものだ。

「AAの会ってのがあるんですよ。・・・（略）・・・そこでもって私は、奇跡的に助かったんですよ」。アルコール依存症の人たちが自主的に運営し、自らの経験を曝け出し語り合う場を設けるAA（Alcoholic Anonymous）という自助グル―プがあり、鈴木さんも病院に入院しながらその会に参加していた。

「そこも会場になってやるけれども。そこは病院だから手当ね。俺なんか牢屋に入れられたんだから」。目の前にお膳が置かれ、背後にはトイレが掘ってあるだけの部屋。禁断症状が出て暴れると、そこに入れられるのだという。

症状の一つとして、手の制御が利かなくなるということがあり、叫びながらスリッパで壁を頻りに叩く鈴木さんに、他の患者から「あいつに眠り薬やってくれぇぇ！」と声が上がることもあった。

僕らは久しぶりに会った友人同士のように笑いながら、休憩もなく話し続けていた。

思いついたことから順に、矢継ぎ早に語る彼は、僕の質問一つ一つをきっかけに、断片的な記憶を掘り返しているようだった。

気付かぬうちに「お酒が飲みたくてしょうがなかったのか」という質問を僕は何度も繰り返していた。鈴木さんは「酒が酒を呼ぶんだからね」とこぼす。「逃亡も二回くらいやってるんだから」と平然と話す彼は、刈り取り積んであった庭の草を踏み台に塀をよじ登って、束の間の逃亡を果たす。僕はアルコール依存症患者を安易なイメージと結びつけ、また「それはお酒が飲みたかったからですか」と繰り返した。「うーん、ちょっとそのねぇ、酒屋まで遠いんだよそこが。酒屋遠くまで行けばあるんだけどね。まぁ、でも帰りたかったな、その一心だなぁ」。

部屋には、鈴木さんが左手で弄んでいるボールペンがテーブルに打たれる音が絶えず響いていた。

早慶戦が国民的なイベントであった当時、何年かAAの会に参加し、指導的な役割も果たした鈴木さんは、会の中で慶應出身の人と出会い、意気投合したりもした。ただ、思わぬ訪問者もある。

「弟がねぇお袋を連れてきたんだよ。でほらあの、一番悪い時に。これ見とけこれ見とけ、と。財産自分のものにしたいからよ。・・・(略)・・・お袋が見てさぁ、んー、まぁ、涙こぼしたんだろきっと。うん。そういう悲劇を生む、酒っていうのはそういうのがあるんだわな」。そんな話の最中でも鈴木さんから悲壮感は感じられなかった。あくまで淡々と、それは自虐的であるのとも違う、何かもう過ぎたことと割り切っているような動じなさがあった。そういう状況があったことを他人事のように語れるのは、自己に対する諦念ゆえであろうか、色気を出して相手に自分をどう見せようなどとは、もちろん微塵も考えていないようだった。

最後に幻覚の話になった。「一人にされるとそれがあの出てきちゃうんだよ。独房で」。日本でもブラジルでも見たことがないどこかの風景を鈴木さんは見ていた。「んー、何かあれだなぁ。教会が出てきたなぁ、俺のやつは。雪がたっぷり降って、そんなかに教会みたいなの出たりして」。彼にとって幻覚は「夢の中みたいなもん」らしい。雪の降り積もった教会と聞いて、いやに綺麗だと思えた。ただ、想えば想うほど、その情景への寂寞感も禁じ得なかった。

## キリスト教と過去への意味づけ

孫夢

初めてSさんと出会ったのは登戸の駅だった。彼女は野球のカバンを持ち、すごく力が強そうな人だと思った。腕に同性愛のレインボーのマークを付けていた。だから彼女から「私、昔同性愛だったよ」と言われた時、まったく不思議とは思わなかった。

Sさんのお母さんはカトリックである。母方の親はお母さんが幼稚園の頃に離婚した。その後お母さんと兄弟姉妹たちは施設に預けられたという。そこはカトリックの施設だった。「最初はうちのお母さんはすごく厳しい人だと思った。（中略）生活の中でたくさんのルールがあったから」と彼女は言う。彼女はそのルールを守るのがすごく嫌だったが、今ではそのルールがあってよかったと思う。なぜなら「愛情はすごくある」と感じたからだという。

彼女のお母さんはノンクリスチャンのお父さんと結婚した。そのため、家族の前でお祈りすることを遠慮し、少し目をつぶり、心の中でお祈りしていた姿を見たという。Sさんは母親と一緒に教会へ行くことはなかった。ただ、彼女が小学校の五年生の時、たまたま家の近くの公園でプロテスタントの宣教師の人たちが子供向けの伝道をしていた。宣教師の話が面白く、子どもでも分かるように話していたという。家に帰ると、彼女は自分の母親に嬉しそうなあまり「今日、初めて埼玉教会に行ったよ。キリスト教の教会なんだよ。ママもキリスト教のクリスチャンでしょう」と報告したという。しかし、彼女の母親は「そこはプロテスタントの教会だよ、ママはカトリックだよ」と残念そうな顔をした。「もしかして、お母さんが行っている教会と何か違うんだろうなあってことはこどもだけど、ちょっとわかった」。それから彼女は毎週日曜日に〇教会のキッズチャーチ（子供教会学校）に通うようになったが、母親から借りた聖書とみんなが読んでいる聖書の違いに改めて気づいた。その時、彼女は「ちょっと仲間外れ」と感じたという。

Sさんは大学四年生のとき、同性愛のパートナーと知り合った。しかし、同棲して社会人二年目の時、パートナーが同棲していた家で自殺した。この出来事から彼女は精神病になり、精神科病院で一ヶ月過ごすことになった。病院を出てからも病気は回復することなく、ずっと引きこもりだった。ある日、電車で自分が座っていた席を赤ちゃんを抱いた人に譲った。たまたまその人は牧師だった。その牧師は「私は登戸教会で牧師をやっていますよ。よかったら私の教会に行ってください」と彼女を誘ったという。その頃の彼女はひどい心の病気だった。だから、教会に行くことすらできなかったという。パートナーを失い、彼女は神様のことを一度嫌いになった。自分のパートナーを死なせ、命を奪った神様を嫌いだと思ったという。ある日、彼女は登戸の近くに用事があったとき、以前電車で席を譲った牧師を思い出し、彼の教会に立ち寄ることにした。そして彼女はこれから教会に通おうとその時に決めたという。その後クリスチャンになり、聖書を熱心に勉強した。彼女のパートナーの死は神様からの試練だと思い、自分の腕にある同性愛のレインボーマークは神様との約束なのだということを思ったという。これからは「同性愛を絶対していくつもりはなく、異性愛にすると決めた」とSさんが言う。また異性愛と同性愛の違いを聞いてみると、キリスト教の聖書を勉強してから「別のものだった」と分かったという。しかし、人に対する愛そのものは「亡くなった彼女にしても、異性愛の彼にしても、この人のために何でも注ぎた

い、この人のために私が犠牲になってもいいから何でもしてあげたい気持ちはどっちも一緒だと思う」と答えた。またこれからの恋愛を聞くと「神様は『正しい方に行きなさい』って、だから私は正しい方に行く」と答えた。

また、Sさんはパートナーと一緒に同棲していた家に今でも住んでいる。彼女のパートナーがそこに自殺したのに引っ越ししない理由を聞いてみると、「パートナーが自宅で死んでしまったことはもう関係ないよ。私はクリスチャンだから、神様に全てをお委ねしたので、もう何も怖くない（中略）」と彼女は答えた。Sさんは十歳ぐらいから不眠症で、以前パートナーと同棲していた時、ノンクリスチャンのパートナーから十字架をもらったり、教会へ行くことを勧められたり、不眠症が治るようにパートナーが頑張ったという。しかし、今でも睡眠薬を飲んでも効果はない。しかし彼女は神様の力によって不眠症を治せると信じている。今までずっと彼女は介護の仕事をしていたが、最近野球の練習で怪我したため、仕事を辞めた。これからも福祉関係の仕事をしたい、自分の仕事を通して人々を助けるように頑張ると彼女は言う。

今、彼女は精神病と戦いつつ、就職活動をはじめ、人生を前向きに踏み出している。

注

1） 今年度着任した深山直子との分担（詳しくは脚注3参照）だが、前半の講義は主に田沼が担当した。
2） 資料1（授業計画）、資料４（調査計画）参照。
3） 国際フィールドワーク論は半期だったところ、社会人類学演習IIは通年なので、本演習の前期をこの授業に当てた。後期は新たに「参与観察」に特化した内容を深山直子が、「映像と人類学」の実践的演習を田沼が担当することにした。
4） 資料２、３参照。また、本人が自分で書いた内容をチェックできるように田沼が評価基準を明確にしたルーブリック（資料５）も作成した。
5） 調査対象者には、本論の掲載と研究室ホームページへの掲載に関して、調査者への同意書を提出してもらった。調査計画は首都大学東京の研究安全倫理委員会の審査にて承諾されている。

資料１

社会人類学演習（通年）
水曜日２限（10：30～12：00）
2016年度授業予定表（前期）

| 回 | 日にち | 講義・演習内容 | 調査と執筆 |
|---|---|---|---|
| 第1回 | 4月13日 | イントロ：授業の目的と進め方 | |
| 第2回 | 4月20日 | 「視点」という問題 | |
| 第3回 | 4月27日 | 量的調査、フィールドワークと聞き取り調査 | 調査テーマについてのブレーンストーミング |
| 第4回 | 5月11日 | インタビューの技法／作品化のプロセス | グループ分けとテーマの設定 |
| 第5回 | 5月18日 | 名著の講読（演習）オスカー・ルイス『貧困の文化』 | グループの画定とテーマの設定（班長と二人組） |
| 第6回 | 5月25日 | 名著の講読（演習）エドワード・ファウラー『山谷ブルース』 | テーマの設定（各グループで） |
| 第7回 | 6月1日 | 調査内容のプラン構想ブレスト（調査対象・調査内容の策定） | 調査内容のプランを構想 |
| 第8回 | 6月8日 | 聞き取りシミュレーション（二人ひと組で、お互いにインタビュー） | 各自で調査 |
| 第9回 | 6月15日 | フィールドワーク・セミナー（先生の事例体験談） | 各自で調査 |
| 第10回 | 6月22日 | 個別相談（教室は明けておきますので、相談が必要な人は来てください） | 各自で調査 |
| 第11回 | 6月29日 | 中間発表（全員出席） | 中間発表・進捗状況の確認（各グループごとに） |
| 第12回 | 7月6日 | 個別相談（教室は明けておきますので、相談が必要な人は来てください） | （ライティング・セッション／ライフヒストリーをまとめる） |
| 第13回 | 7月13日 | 個別相談 | 提出締め切り：7月15日 |
| 第14回 | 7月20日 | 作品の合評会 | 書き直し提出：7月23日 |

●質問等は、s-tanuma@tmu.ac.jpにお願いします。

資料２

作品化の方法をぬすむ（2016年６月１日）

『山谷ブルース』『西太平洋の遠洋航海者』における記述法

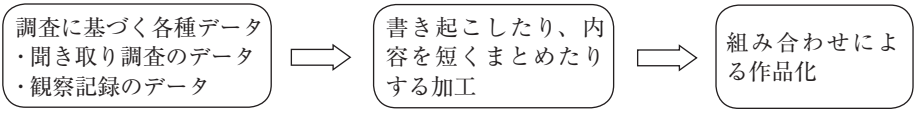
（1）観察に基づく描写：
後方の焚き火で手を暖めながら暖かく見守る男もいる。にこにこしながら顔が揺らめく明りに浮かび上がる。五人組のブリッジバンドに合わせて容器に歌う人も多い。（『山』243）

ボヨワについてまず驚くのは、住民たちの肉体的特徴が種々雑多なことである。背が高く、りっぱな態度で、優美な顔つきをし…（『西』74）

（2）直接引用：
「…けど、ここがふるさとだ。わしのふるさとはここしかない。あんたらのふるさともここだけだ。やってみないか、どうだ？」（『山』258）

（3）間接引用
家族や同僚やその場限りの友人にたかる怠け者で何をやってもダメな兄のことしか覚えていなかった二人は、浜松が山谷で組合員で日雇い労働者の運動の積極的な支援者であったことを知って驚いた。本当にそんなに変われたのだろうか？「昔の」浜松を知らないので、よく分からないと仕事仲間が答えた。（『山』254）

（4）いろいろなタイプの記述の組み合わせ
神戸が席に着き、宴会は続く。しかし、まだしゅんとした雰囲気になる。外が暗くなってからもうずいぶん経つ。いい集まりだった。浜松がうらやましい、という人もいる。「俺の葬式の時にこんなに集まってくれるかな？」と誰かが悲しげに言うともなしに言う。（『山』258）



資料３

社会人類学演習Ⅱ
レポート要領（2016年６月１日）

（1）聞き取りを作品としてまとめたものをもって、レポートとします。

（2）レポート分量は2,000字とします。

（3）Word等ワープロソフトで作成してください。形式は以下の要領で。

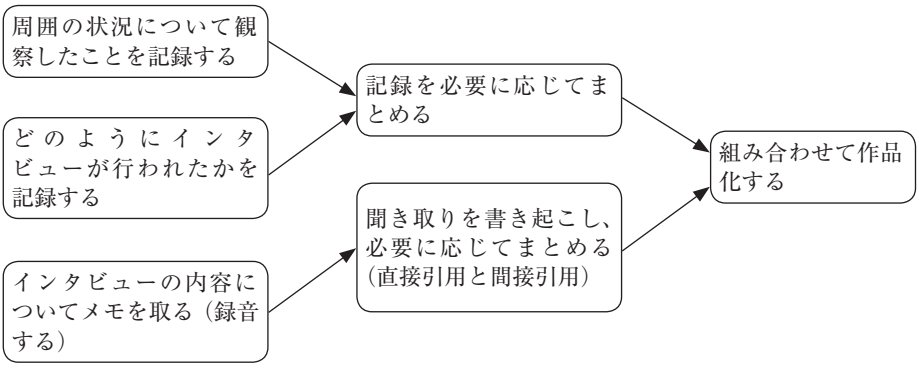
| |
|---|
| 本文フォント：MS明朝、10.5ポイント、余白：標準（上35.01mm, 左右と下は30.0mm）<br>タイトル：12ポイントで真ん中。名前は一行下げて9ポイント。右に寄せる。 |

（4）口頭発表することを意識してください。合評会前の締め切りは7月15日です。
書き直し締め切りは7月23日です。

（5）提出先は、s-tanuma@tmu.ac.jp（田沼）。
件名に「社会人類学演習II（○○受講者の氏名）」と書いてください。
ファイルは添付してください。

作成の手順（第５回講義資料を参照）

●（a）データの記録、（b）データの加工、（c）組み合わせて文章化、という三つのプロセス



●作品を構成する文のタイプ

基本的には、以下の三つのタイプの文を組み合わせて作品化する。しかし、各自の創意で工夫してかまわない。

(a) 観察に基づく描写：
大阪と京都を結ぶ私鉄沿線の小さな駅を降りた商店街のなかに、Aさんの乾物屋はある。商店街の20軒中9軒がシャッターを閉めており、アーケードを行きかう人はまばらだ。

(b) 直接引用：
「状況が変わったのは20年くらい前からやろな。この先の国道にショッピングセンターができて、この辺には全く人が寄り付かんようになってしもうた。」

(c) 間接引用
Aさんは、商店主たちを集めて何度か会議を開いたが、利害の対立のせいで効果的な対抗策を打ち出すことができなかったという。一部の商店主は変化を宿命と受け止め、「どうせ無駄」な対策に投資するのを拒否したのだそうだ。

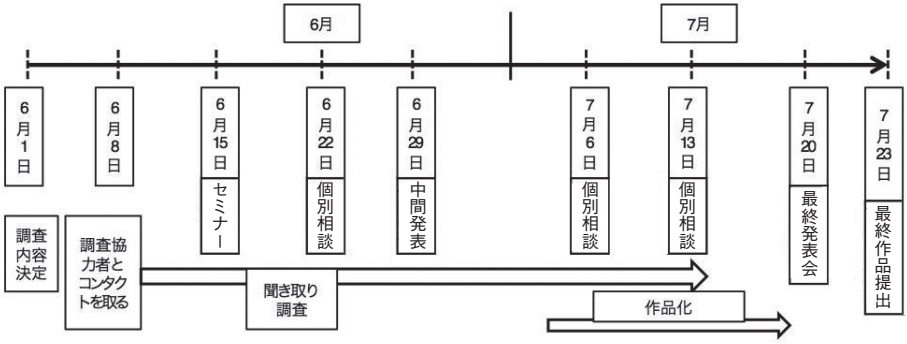
●うまく盛り込んで欲しい要素
(a) 聞き取りのテーマに関して、語り手がどのような視点を持っているか分かるように提示すること
(b) 語り手の生活史の特徴（どのように暮らしてきたか）が見えるように提示すること

→　ルーブリックで確認する

資料4

社会人類学演習Ⅱ
調査を計画する（2016年6月1日）

◎フィールドワークに、絶対的な方法はありません。常に現場で考え、臨機応変に対応してください。




(1) 調査対象を選ぶ指針

自分の「あたりまえ」を相対化できるような対象
学問にとって／社会にとって／自分にとって意義のある対象
実現可能な対象（経済面・言語面・時間面など）
安全上・倫理上問題のない対象

(2) 調査対象者へのアプローチ

紹介してもらう／突撃する／偶然を生かす／参加メンバーになる（である）

(3) あきらめること

(4) 実際の調査プロセス

①依頼状を持って、調査協力者に会いに行く。
②自分の調査目的について、調査協力者に説明する。
③調査協力者の許可をもらって、インタビューをICレコーダーで録音する。（ICレコーダー貸出可）
④テープ起こしをする（全部あるいは一部）。
⑤自分の調査テーマとインタビュー内容を往還しながら、作品のテーマを絞る。

⑥作品化の技法（第5回、第6回の授業内容参照）を用いて、作品を作る（字数2000字）。
⑦作品化においては、場所や人物があまり特定できないようにする（しかし、場合による）。

(5) 作品化のヒント

①何かしら「発見」と感じられるものに注目し、クリシェ（決まり文句）に頼らず言語化する
②第三者がわかるように背景説明と用語を平易なものにする
③うまく整理できないときは、ポストイットにキーワードを書き出して空間で考える
④どうしても削れない、と思っても「長いなー」と思った人のインタビューを思い起こす
⑤声に出して読む
⑥人に読んでもらう

最終作品提出先：田沼幸子：s-tanuma@tmu.ac.jp

## 資料５

### 課題　「社会人類学演習Ⅱ」レポート

聞き取り調査を行った内容に基づいて、民族誌的（ethnographic）レポートを書きなさい。

| 観点 | 素晴らしい！（2ポイント） | よし！（１ポイント） | 残念・・・（０ポイント） |
|---|---|---|---|
| ①状況の記述 | どのような状況で相手に話を聞いたかが、情景が目に浮かぶように感じられる | どのような心境で相手に話を聞いたかが、感じられる | どういう状況で話を聞いたのかが書かれていない。ないし、伝わってこない |
| ②相手の言葉の引用の仕方 | 相手が使った言葉（現地語）や語り口が、レポートのテーマと合う形で効果的に（説得力のある形で）引用されている。 | 相手が使った言葉や語りを引用している | 相手の言葉を十分に引用しておらず、語り口が伝わってこない |
| ③自分の意見・発見 | 調査したことによって新たに気づいたことを、考え抜かれた適切な言葉で表現している | 調査したことによって感じたことを、一般的な（常識的な）言葉で表現している | 調査したことによって新たに気づいたり感じたりしたことが、特にない（表現できてない） |
| ④聞き取りの深さ | 筆者のみならず、他の受講者も初めて聞く内容を、深く聞き取れている | 筆者にとっては新しい内容を、聞き取れている | 筆者にもあまり目新しくない内容で、聞き取りが表面的である |
| ⑤文章構成（×1/2） | 文章は論理的な順序で記述され、読者は内容を容易に理解することができる | 文章は論理的な順序で記述されていないところがあり、内容を理解しにくいところがある | 論理的な順序で組み立てられていないので、読者はその内容を理解できない |
| ⑥日本語（×1/2） | 日本語の文章を書く上での誤り（漢字、改行、一行目は一字空けるなど）がない | 日本語の文章を書く上での誤りは５個以内である | 日本語の文章を書く上での誤りが５個以上ある |

（2000字以内、メール：s-tanuma@tmu.ac.jpに提出。締め切り：7月15日）